

教宣 せぶん

推理小説の犯人が.....。

20日の露口証人への反対尋問で「転進募集が実施され、残ったRA社員も混在支社に配属され、いま会社が言うところの78億円の費差損はいくらになったのですか？」と質した場面がありました。「詳細はわかりません」と証人は答えましたが、「詳細は結構ですので、おおよそいくらですか？10億円以下くらいにはなっているのではないですか？」とさらに質問しました。証人は「そのくらいにはなっていると思います」と答えざるを得なかったわけですが、実はこの前段で「3月のRA専門部会の議事録に、費差指数が127.6となったと記載されていますが、それはどの程度の費差損だったのですか？」という質問がされていました。この質問に対して証人は「12月末時点の数値ですが、40億円程度の費差損です」と答えていました。

私たちの代理人の先生はこの二つの質問に対する露口証言をあわせて「さきほど3月のRA専門部会では、費差損が40億円の時に、制度存続を前提に改善策を検討したと言いましたが、10億円になった現在、改善策に着手できる状況ではないのですか」と尋ねました。証人は「そのような状況ではありません」と結論だけを答えましたが、そのあまりにも短い、自信のなさそうな答えに、拍子抜けしてしまいました。「え、それだけの答え？」とあってしまいました。例えるなら推理小説の犯人がわからないまま物語が終わってしまった物足りなさを感じました。

もちろん、事前に反対尋問のシナリオなど知らされていないわけですが、反対尋問を聞いていてそのやり取りに引き込まれてしまい、この質問に対する露口証人の答弁にとっても興味が沸いたのです。変な話しかもしれませんが、「どうしてそのような状況ではないのかをもっと雄弁に語らなければならない場面だぞ」とこの時ばかりは傍観者になって、露口証人にエールを送っていたような気がします。

この反対尋問の一連の流れを見れば、ここが私たちの先生が裁判官に一番指摘したかった、いわばクライマックスとも言える質問でした。そして私たちの団交では、決して気がつかない、やれと言われてもできない、法の専門家ならではの合わせ技の質問でした。傍観者としては不満が残った回答でしたが、このやり取りで、制度廃止問題が「費差損があるから廃止する」のではなく、まず「制度の廃止ありき」でその理由をこじつけるために「費差損が出てきた」という起承転結であることがハッキリしたのではないかと思います。裁判官にもこの訴訟の全体像・本質がしっかり伝わったのではないかと思います。

私たちは10月7日以降、私たちの側から立証もできない78億円という額に脅かされてきました。「それじゃ仕方がない」と思って、社員の道を自ら断ち切った仲間もたくさんいます。しかし、結局のところ78億が40億だろうが10億だろうが、ひょっとしたらゼロであっても、この経営は私たちの雇用を断ち切ろうと目論んだのではないのでしょうか。どんなに言い繕っても、私たちを新会社から追い出そうと画策したのではないのでしょうか。推理小説の犯人がわからずじまいに終わったことでその確信がますます深まりました。